【題名】秘境出張
【氏名】山田ももこ

どこまでも澄んでいる海を目の間にして、青さで身体を満たそうと息を深く吸う。しかし、美しさへの感動の底に、既視感がちらつき始めると、とたんに萎えてしまって、頭上に照り付ける日差しばかりが気になり始めた。せっかく来た川平湾に背を向けて、足早にタクシー乗り場へ向かう。インターネットで見た写真と大差がないなら、わざわざ旅行にくる意味なんて、あるのだろうか。

タクシーに乗り、ホテルの名前を告げる。エアコンで冷やされた車内のなかでわたしは、お正月に実家に帰省して、何度も読み直したスラムダンクの、涙の痕がついたページをめくりながら、また目頭が熱くなる感覚を思い出していた。何事もきちんと計画しないと落ち着かない性格のせいか、旅行でも念入りに工程表をつくってしまうせいか、現地に着く前に、めぼしい観光地の写真を何度も眺めることになり、絶景を前にしても、知っている感動をもう一度なぞるだけになるのだった。

タクシーのメーターの斜め上、フロントガラスに目をやると、証明写真付きの名札が貼ってある。どうやら運転手さんは桃林さんというらしかった。石垣島は暑すぎて桃が取れるとは思わないが、果物がつく苗字は南国風で、朱色のかりゆしウェアが日焼けした肌に馴染んでいる。地元のひとかもしれない。

バックミラーを覗くと、桃林さんの顔がみえた。目じりが優しく下がっていて、白い眉毛の間の眉間は大きく開いている。知らない土地にひとりできた寂しさで、人恋しくもなっていたわたしは、思い切って声を掛けてみた。

「あの、運転手さんて、ずっとこの島に住んでいるんですか」

「そうですよ。生まれた時からさ」

さ行が間延びした声は、石垣島を歩いていると肌を覆う空気と同じ、温かなやわらかさがあって、気持ちが和んだ。いくつか当たり障りのない会話をしたあと、自然と旅に関する話題に移った。

「初めて行った本土が、長崎だったんですよ。船を降りたらびっくり。雪が降っていて、転んじゃいましたよ。何しろ、初めて見たんだから」

わたしが声をあげて笑うと、桃林さんは一層声を弾ませた。

「船を降りてすぐ、公園の屋台で焼きそばを食べたんです。そしたらね、固くて驚きましたよ。ほら、石垣のは、柔らかいでしょ」

やや遅れて、桃林さんが、皿うどん、つまり堅焼きそばを食べた思い出を話してくれたのだと気付く。

「昔は、旅の全てが新鮮な出会いだったんですね。なんだか羨ましいです。わたしなんて、何でもすぐに検索しちゃうから、名物はおいしいと思っても、大体想像通りの味で、大した驚きはないですね。誰も紹介してない秘境なら別でしょうが、今じゃ、めったにありませんから」

「今だって、秘境はきっと、そこら中にありますよ。本当はお客さんだって、もう出会っているんじゃないですか」

桃林さんの優しい声で言われてみると、たしかに何か大切な思い出を忘れてしまっているような気がしたが、思い出す前にホテルに着いてしまった。

ホテルは混んでいて、チェックインまで時間が掛かった。水色の布張りのソファに座りながら、秘境について思いを巡らせた。

チェックインすると、窓からは、背の低い住宅街の奥に海が見えた。まずベッドに寝転がり、糊が効いたシーツに顔を押し付けると、物語がなめらかに繋がり始めた。桃林さんの運転するタクシーから眺めたパイナップル畑を目に浮かべながら、もう二度と会うことがないだろう心優しいタクシードライバーに聞いてもらうつもりで、わたしは語り損ねた旅の思い出を、ホテルの名前の入った便箋に書き付けたのだった。

二年前の初夏、中国の山東省への出張中、夕飯をとるために、わたしは地元の飲食店に入った。注文するとテーブルに運ばれてきたのは、一見ただの塩の山が盛られた皿だった。困惑したわたしは、店員を呼んで食べ方を尋ねようとしたが、忙しいらしくなかなか相手にされない。見かねた隣のテーブルの女性が、スプーンを使い、塩の山を軽く叩いてみせると、中からマテ貝が姿を現した。

驚きと感謝を伝えると、彼女は「ルー」と名乗り、自分の名前を「鹿」という漢字で示してくれた。珍しい名前だと思いながらも、彼女と一緒に食事を楽しんだ。

食事の終わりに、ルーは家に来てお茶を飲まないかと誘ってくれたが、時間も遅かったため、わたしは丁寧に断った。ルーがいつまで滞在する予定かと尋ねてきたので、日曜日の飛行機で帰る予定だと答えると、彼女は「土曜日が休みなら家に来ないか」と再び誘った。再度断ると、「午後二時にこの店で待っている」とだけ言い残して、返事も待たずに立ち去ってしまった。

土曜日、約束を破るのは申し訳なく思い、再びレストランへ向かうと、ルーの姿は見当たらなかった。しばらく待ち、帰ろうとしたところ、遠くから私を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、ルーがバス停で手を振っている。彼女と一緒にバスに乗り、たどり着いたのは都市部から離れた農村地帯だった。広がる畑の中に、灰色の平屋がぽつんと立っており、玄関には、逆さまに貼られた赤い「福」の字が目に留まった。

家に入ると、大きなテーブルの上には雑然と物が置かれており、年老いた男性が椅子に座ってテレビを見ていた。ルーが淹れてくれたお茶を一口飲むと、香ばしさが口いっぱいに広がり、なぜか高校時代に飼っていた愛犬のことを思い出した。あの犬の足を鼻に押し付けて匂いを嗅ぐのが好きだったことが、ふと頭をよぎった。

「おいしいですね。でも、それ以上に、なんだか懐かしい気持ちになります」

「このあたりに伝わる、伝統製法で作られているんですよ。ちょうど季節ですし、お見せしましょう」

そうして連れてこられた場所は、山寺だった。境内には、樹齢二百年超えるらしい紅茶の樹が立ち並んでいた。葉がつまれ枝だけになった木に鼻を寄せると、「香りがするのは葉っぱだけですよ」と、ルーは笑った。

天日干しされている茶葉の香りを嗅いでみたが、あの懐かしい香ばしさは感じられなかった。

「香りが違うでしょう」

ルーはわたしの表情をのぞき込んで、いたずらっぽく笑いながら時計を確認し、「もうすぐ始まる頃ですよ」と、手招きした。

ルーに連れられて社殿の裏をのぞくと、地面に敷かれた赤い布のうえに、発酵して茶色

に染まった茶葉が積まれていた。しばらく待っていると、金色の袈裟をきた老僧に連れられた、一匹の茶色い犬が現れた。昼下がりの柔らかな光の中で、毛並みが美しいマホガニー色に輝いている。背丈は人の腰ほどまであり、引き締まった足や長い首、精悍な顔立ちは、馬を思い出させた。神の使いだとされるこの犬は、代々守り神として、神社に仕えているらしい。首に着けた鈴を鳴らしながら、犬はゆっくりと茶葉を踏みつけ、その度に大きな黒い肉球がみえた。

ルーに見送られ、バスに揺られて街へと戻る最中に、茶葉を買わずに帰ってきてしまったことに気付き、後悔した。もしかしたらルーに会えるかもしれないと、日曜日の昼に飲食店に立ち寄ってみたが、会えないまま日本へ帰った。

また出張で行けば会えるかもしれないと期待していたが、コロナで渡航ができないうちに、取引先が変わってしまい、行く機会は失われてしまった。

大切なひとを呼ぶという意味をもつ名前の、あのお茶をもう一度飲みたくて、インターネットで検索してみたが、どんなに探してもGoogleでは見つからなかったのだった。（終）